

中海漁業実態調査（刺網・ます網）

（中海有用水産動物モニタリング事業）

松本洋典

1. 研究の目的

中海の代表的な漁業で、ほぼすべての魚種の周年的な出現動向を把握しやすいます網と、成魚を積極的に漁獲している刺網の魚種や漁獲量を詳細に把握し、中海の有用魚介類の有効活用を図るための基礎資料を収集する。

2. 調査方法

(1) 標本船野帳調査

漁業実態および有用魚介類の動態を把握するために、刺網1地区（江島）、ます網2地区（東出雲、本庄）で、漁業者各1名に操業日誌の記帳を依頼した。

(2) 漁獲物買取り調査

ます網2地区（本庄、東出雲）において、月1回の頻度で全漁獲物の買取りを行い、出現魚種や体長組成等を調査した。

3. 調査結果

(1) 標本船調査

今年度の刺網の年間漁獲量は平年（過去5年平均、以下同様）よりも約4トン少ない4.9トンで、平年の55.4%であった（添付資料-表1）。魚種組成は、ボラとスズキの2魚種が漁獲の大半を占める（9割）状況は平年と同様であるが、今年度は前年度多かったキチヌ（前年度0.27トン）が姿を消したことが特徴的であった。

今年度のます網の年間漁獲量は本庄は1.6トン、東出雲は1.0トンで、本庄は平年よりも0.7トン少なく、東出雲も平年よりも0.4トン少なかった（添付資料-表2、3）。今年度の主要魚種の組成を平年と比較すると、ヒイラギが東出雲で増加した。

(2) ます網漁獲物買取り調査

買い取り調査を開始した平成20年以降今年度までに本庄水域で確認された魚介類を取りまとめたところ、魚類が14目44科の87種、軟体類が3目3科の5種、甲殻類が1目8科の16

種で、合計18目55科108種であった（添付資料-表4）。

今年度の本庄の出現種の組成を尾数割合（添付資料-表5）で見ると、ヒイラギ、サッパ、マアジが多く、この3種で全体の7割以上を占めた。

買い取り調査を開始した平成20年以降今年度までに東出雲水域で確認された魚介類を取りまとめたところ、魚類が14目40科の79種、軟体類が1目1科の2種、甲殻類が1目6科の13種で、合計16目47科94種であった（添付資料-表4）。

今年度の東出雲の出現種の組成を尾数割合で見ると、ヒイラギの出現尾数の割合が最も高く、次いでサッパ、スズキと続いた。（添付資料-表5）。